

スコープ

笑うに笑えない話 このままで良いのか日本

出羽三山神社 宮司 緒方 久信

北国特有の豪雪には、さぞかし驚いたことであろう。とは、筆者が東京から当出羽三山神社へ赴任して間もない平成六年の冬、降りしきる雪の中で聞いた当地の人の話である。南国生まれで大雪とは縁遠いこの身にとつて正に驚きそのものであったが、早六年の歳月を経た今日、雪にも寒さにも馴れたようである。言葉にはいまだ不自由しているが、最近では交わす言葉にも庄内弁が自ずと出るようになってきた。

東京に比べると生活の利便性には何かと違いはあるが、サクランボやラフランスなど、当地ならではの果物や豊富な特産物にも恵まれ、また庄内産の米や酒、澄んだ空気などこれまた結構といった処で住めば都、当地の自然の恩恵に浴しつつ、日々の生活を満喫している昨今である。

ついでに当三山神社のことにふれ述べてみたい思いはあるが、それはまたの機会とし、さて現下の世相をみるに、どうした日本、このままで良いのか日本、わが国の行く末が大いに案じられてならぬ。

家庭内暴力やいじめを始めとし、これから二十一世紀を担う青少年の勝手な行動や、日常茶飯事のごとく多発

する若者の非行や犯罪など、まことにゆゆしき事である。さらには理解できぬいかがわしい宗教の出現、法の番人たる警察官のたび重なる不祥事に至つては弁解の余地すらない。一体誰を信用すればいいのであるうか。「物で栄えて心で滅ぶ」とはいみじくも、福田元総理の当時の世の様を憂いての言葉だったかと想像するが、今にして思えば的を射た至言であり、ますます悪い方向へ進んでいるといつても過言ではあるまい。

表題の笑うに笑えない話をひとつ。それは昭和五十五年、東京の明治神宮の社頭で女子中学生と交わしたエピソードである。「明治神宮には誰がお祭りしてあるか知ってるか?」というこちらの問いに対して、「明治大学と何か関係あるのか」との返答にはほどほど驚き入った。もしや揶揄しての発言かと、疑いの思いで一瞬腹立たしさを覚えた。が、ご祭神を含めいろいろお話ししてあげたところ、さにあらず、どうもありがとございました。学校でも家でも教わらなかったので大変勉強になりました。という返事で、何だか変な気持ちになったものである。

これらも戦後の偏向教育の弊害に

よるものであろうが、倫理観の欠如はもとより目に見えないものへの憤みや畏敬の念など、これまで日本の伝統であった良風美俗は何処へ行ったのであろうか。行・賤・政等の改革がしきりと叫ばれる中、しばしば小淵総理の発言の中に見られる如く、教育の改革こそが最も必要ではなからうか。そこで思い出されるのが、明治二十三年十月三十日に渙発され、戦前学校教育の基を成した教育勅語のことである。

残念ながら、敗戦により占領政策として、昭和二十三年、国会の両院にて失効の決議を余儀なくされてしまい、現状では復活を望めそうにない。ならばその勅語の精神(心)だけでも学んでほしいものだ。失効以来既に五十有余年を経た今日では、勅語の言葉すら知らない世代が多いと思う。永遠普遍の教とも称された教育勅語は、時あたかも今年に渙発以来百十年の意義ある年に相当する。これを機に是非ともいま一度その内容にふれ、今後の教育指針として、また教本として学んでほしいと、今日の荒廃した学校教育の現状をみるにつけ、つくづくと念願する次第である。